

## 愛石筆《清江釣船図》（関西大学図書館蔵）

カラヴァエヴァ・ユリヤ  
Karavajeva Julija

### はじめに

江戸時代の文人画家を代表する池大雅には、愛石（生没年不詳）という弟子がいた。愛石はかなり研究しにくい画家である。というのも、愛石の伝記と画業には不明なところが多いからである。愛石は、紀州の人で池大雅に絵画を学んだと伝えられている。また愛石は、池大雅の斡旋で黄檗宗の僧になったという説もある<sup>①</sup>。従って愛石は、僧として画業を続け、当時の文人野呂介石・長町竹石と併せて三石と称されていた。さらに愛石は、大塩平八郎と交遊し、天保八年（一八三七）の乱に連座して捕われ、高齢ということもあって、ついに病死したという説がある<sup>②</sup>。なお、先行研究においては、愛石の略伝しか載せていない文献が多く、作品の様式にかかわる解説は極めて少ない。大坂画壇の図録に愛石の名前を見出すことができるが、その作風や制作についてはまだまだ研究の余地が残されている。

### 愛石の《清江釣船図》をめぐる

さて、関西大学図書館に所蔵されている《清江釣船図》【図1】は、「言いて妙」とでも形容できる愛石筆の山水図である。本図の材質寸法は、

絹本墨画淡彩で、縦一〇七・六×横三一・五センチメートルである【図2】。まず前景においては、左側から突き出る岩石が注目され、その頂上には伸び広がる樹木が描かれている。残りの画面は余白となっており、それによって河の流れが示されている。前景に広がる水面の中央には、釣船が静かに浮び、船の中には帽子を被った漁夫の姿が見られる【図3】。さらに、中景には山並みが広がって、樹木の間素朴な山小屋が並んでいる。加えて、前景の水面は中景に続き、特に大きな川の流れは遠景に後退していく。彼方の遠景には淡い筆致で描かれた平板な山がかすかに見える【図4】。その近くには河川が広がり、水面には小形の釣舟が浮かんでいる。そして、画面左上に「清江釣船図 愛石」【図5】の墨書が加えられて「愛石」（朱文方印）【図6】と「画禪」（白文方印）【図7】が捺されている。制作年は不明であるが、江戸後期に入る頃の作品である。

さて、画面の構図は、描き込んだ岩石の形態と、余白にされた水の表面を示す部分が対照的あるいは律動的に組み合わせられている。言い換えば、空白部分と密度のある岸の情景がバランスよく整えられている。特に全景全体を眺めると、画面左側に斜めに配置されて表わされた岩石、中景に見られる川の流れ、それらをくつきりと浮かび上がらせている輪郭が、画面に印象深いアクセントを与えている。すなわち、愛石は、斬新で生き生きした構図によって遠近の表現を実現している。加えて、岩石の配置においても、それぞれの山岳が視点を変更させられながら描かれている。つまり、前景の山は側面図、遠景の山は正面図で示されており、中景の岩石は下がった視点から見られる形で現れている。従って鑑賞者は、自ら釣舟の中にいるような感覚で《清江釣船図》の景色を眺め

ていることになる。

続いて愛石は、筆遣いにおいて、ジグザグに折れ曲がった線描と、あちこちに散らされた点描を総合し、立体感のある岩石を形象化している【図8】。また、素早く施されたかに見える小さな筆致によって、肌理の粗い表面という感覚が引き出されている。代わりに、樹木の葉は、丸い形態と、長く引かれた濃い筆致【図9】で表現され、愛石の師である池大雅の作品と同様の描き方を窺うことができよう。そして、簡略に描かれた釣船は、穏やかで河を滑るように進んでいる。船の中に座っている人物の形態も非常に簡略化されている。愛石は、『八種画譜』のような中国絵画の版本で紹介された作風に倣って《清江釣船図》を描いているが、技術的にはかなりの能力を発揮している。特に墨の濃淡によるコントラストの調整がうまく、さらに優れた色彩感覚も発揮されている。つまり、画面全体は暖色で調子が守られており、朱、藍と黄色などが淡く施されている。一方、穏やかでお落ち着いた色彩から精緻な印象も与えられている。他方、強調された岩石の肌理、そしてその配置によって、多少とも堂々とした表現が感じられる。加えて筆致は、遊び心のあるものとなっており、随所に荒っぽく見える部分が見てとれる。そのため《清江釣船図》において愛石は、一瞥で正反対と見られる側面、特に親しみと偉大さを組み合わせたといつてよい。そうした表現は、池大雅の制作における特殊な表現であり、それを愛石も師から受け継いだと考えられる。さらに、愛石による《春秋山水図双幅》のような山水図を検討すれば、そこでは《清江釣船図》における岩石の描写とは異なっている。つまり、《清江釣船図》には中国画譜に倣った形象化が見られ、それは池大雅の作

風に類似している。そのため本図の制作年を、大雅を学習した時期に位置づけるべきである。言い換えれば、愛石の初期の作品だという可能性を指摘できるだろう。

そして、本図に描かれた清江の風景は、湖北省の名所と関連し、中国文人画によく登場する画題となっている。例えば、台北故宮博物院に所蔵されている呉鎮筆《清江春曉》などである。しかし愛石は、中国の清江の実景を鑑賞する機会を得ることができなかったため、何らかの中国絵画の写本、または画譜からその画題を受けとったに違いない。さらに、愛石と池大雅、木村兼葭堂との友情および私淑が認められているため、愛石は、大雅あるいは兼葭堂のおかげで清江を表す写本に出合った可能性が高い。しかし、愛石の清江図は、想像的な山水の例であり、その風景は個人的なものとなっている。従って本図の原本を探して指摘することは困難である。すなわち、技法において大雅風と中国画風の両方が見られるが、同時に、画面の構図は斬新に造形されている。また愛石は、釣の主題を扱いながら瞑想的な雰囲気をも表現している。とりわけ釣を行っている時間というものは、自然との一体化の契機になり、心が落ち着く時間でもあると解釈される。それは僧の愛石にとって重要な概念であった可能性が高い。言い換えれば《清江釣船図》によって愛石は、居心地のよい風景を描き、釣における自然との一体感と宗教的瞑想の間に共通点を模索したのではなかろうか。

## おわりに

要するに《清江釣船図》は、ささやかな小品ではあるが、愛石の遺品として重要な研究資料となっている。すなわち本図の技法には、中国絵画に倣った手法が示され、よく整えられた穏やかな色調に、愛石の魅力的な色感覚が現れている。さらに形の造形における墨の使用も見事である。そして、巧みに造形された構成には、生き生きとした律動が感じられ、画面には、親しみと偉大さが総合されている。従って、愛石が描いた《清江釣船図》は、瞑想的な雰囲気に溢れた作品であり、個人化された想像的山水として解釈されねばならない。

## 注

- ① 村上泰昭「黄檗僧愛石の書画資料」、『史迹と美術』第七三〇号、史迹美術同友会、二〇〇二年十二月、四〇六頁。
- ② 同書、四〇四頁。
- ③ 中谷伸生著『大阪画壇はなぜ忘れられたのか。岡倉天心から東アジア美術史の構想へ』、京都、醍醐書房、二〇一〇年、五九六頁。

## 【主要参考文献】

大阪市立美術館編『近世の大坂画壇』、大阪市立美術館、一九八一年。  
 大阪市立美術館編『近世大阪画壇』、同朋舎、一九八三年。

関西大学図書館編『関西大学図書館蔵大坂画壇目録』、一九九七年三月。

村上泰昭「黄檗僧愛石の書画資料」、『史迹と美術』第七三〇号、史迹美術同友会、二〇〇二年十二月。

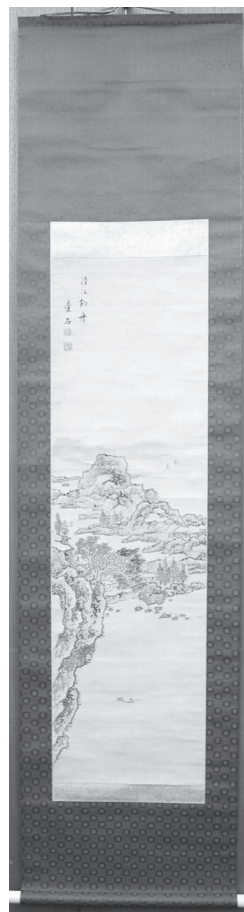
中谷伸生『大阪画壇はなぜ忘れられたのか。岡倉天心から東アジア美術史の構想へ』、醍醐書房、二〇一〇年。

## 〈図版出典〉

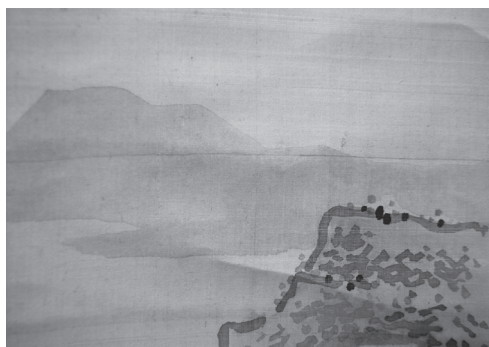
- 【図1】愛石筆《清江釣船図》、江戸時代（十九世紀）、関西大学図書館蔵（筆者撮影）。
- 【図2】愛石筆《清江釣船図》、江戸時代（十九世紀）、関西大学図書館蔵（筆者撮影）。
- 【図3】愛石筆《清江釣船図》、部分（筆者撮影）。
- 【図4】愛石筆《清江釣船図》、部分（筆者撮影）。
- 【図5】愛石筆《清江釣船図》、墨書（筆者撮影）。
- 【図6】愛石筆《清江釣船図》、印章（筆者撮影）。
- 【図7】愛石筆《清江釣船図》、印章（筆者撮影）。
- 【図8】愛石筆《清江釣船図》、部分（筆者撮影）。
- 【図9】愛石筆《清江釣船図》、部分（筆者撮影）。



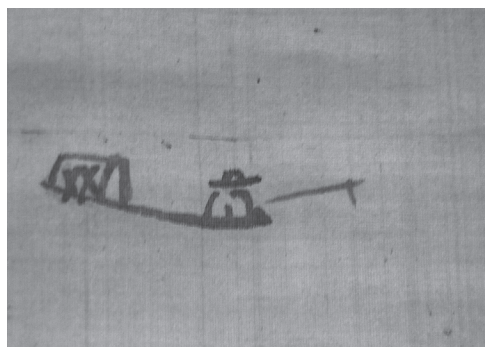
【图2】愛石筆《清江釣船図》、絹本淡彩、107.6×31.5cm、江戸時代（19世紀）、関西大学図書館蔵。



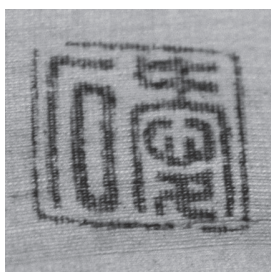
【图1】愛石筆《清江釣船図》、絹本淡彩、107.6×31.5cm、江戸時代（19世紀）、関西大学図書館蔵。



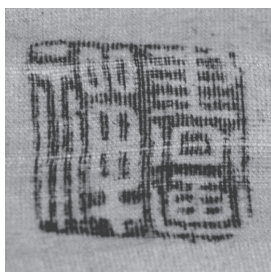
【图4】愛石筆《清江釣船図》、部分



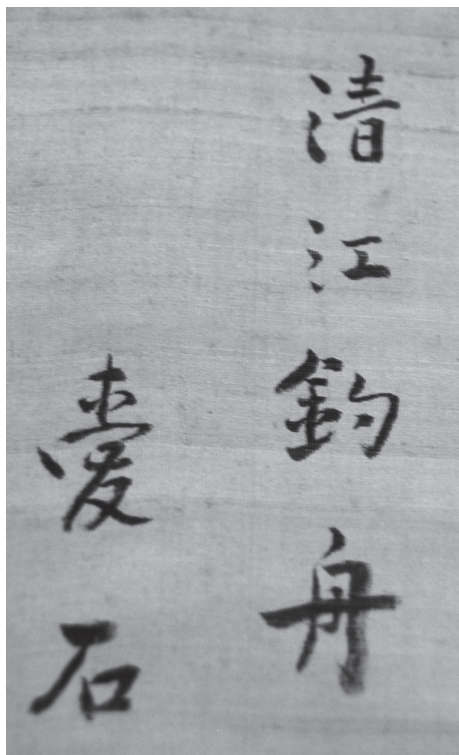
【图3】愛石筆《清江釣船図》、部分



【图6】愛石筆《清江釣船図》、印章



【图7】愛石筆《清江釣船図》、印章



【图5】愛石筆《清江釣船図》、墨書



【图9】愛石筆《清江釣船図》、部分



【图8】愛石筆《清江釣船図》、部分